【メルディア】一般財団法人メルディア 広報誌

MELDIA

FREE
VOL.71
JAN.2026

みいちゃん's SWEETS
お菓子で見つけた未来への道

2026年も開催中!
“街を歩くとアートに出会う”
中野で続く、街中まるごと美術館が
生み出す人々のつながり

チームで作り上げる、最高品質の一品を。
**「天井のない社会」づくりを目指す
革工房・UNROOF**

ことばより、体験を。
**子ども同士が育ち合う
「上目黒どろんこ保育園」の日常**

東京レガシーハーフマラソン2025
**“誰もが走れる未来”を
つくる大会へ**

おさんぽ DE 楽しむ!
＜宇宙玉＞世界にひとつの“宇宙”を。
～寒川でガラス制作体験＆茅ヶ崎で
海風リラックス～

人には
それぞれの
“攻略本”が
ある

倉持由香が ASDの息子と見つけた、幸せの歩幅

人には
それぞれの
“攻略本”が
ある

倉持由香が ASDの息子と見つけた、幸せの歩幅

グラビアアイドル・タレントとして人気の倉持由香さん。プロゲーマーのふ～どさんとの間に授かった長男・湊くんは、2歳の時に自閉スペクトラム症と診断されました。夫婦で悩みながらも、湊くんの成長を信じて歩んできた倉持さんが、家族のかたちについて語ります。

「あれ?」から「やっぱり」へ。診断が下りるまでの不安な日々

「湊が生まれてから、しばらくは普通の育児だと思っていました。あれ？って思ったのは、母乳を飲まなかったころからです」。倉持さんは当時をそう振り返ります。

息子の湊くんは、生まれて間もなく母乳や抱っこを拒み、肌に何かが触れるのを避けるような素ぶりを見せました。初めての育児で戸惑いつつも、哺乳瓶ではミルクを飲むため「母乳にこだわらなくてもいい」と過ごしていたといいます。

その後も発達の不安は続きました。ハイハイや歩行は順調でしたが、1歳を過ぎても言葉が出ません。1歳半検診では、周りの子が親の隣で座って待っている中、湊くんは保健所に着くなり走り出してしまいます。慌てて夫婦ふたりがかりで止めながら、倉持さんは「明らかに周りの子と違う」と愕然としました。「男の子は発達が遅いことが多いから」と保健師に励まされつつも、不安は拭えませんでした。

状況が一変したのは2歳半の時です。湊くんが家でも保育園でも、多い時は一日5回も吐くようになったのです。近所の小児科を何軒回っても原因はわからず、「精神的なものかもしれません」と言われ、児童発達の診察室を訪ねることに。

CONTENTS

VOL.71 MELDIA 2026 JAN.

03 人にはそれぞれの“攻略本”がある
倉持由香がASDの息子と見つけた、幸せの歩幅

07 ことばより、体験を。
子ども同士が育ち合う「上目黒どろんこ保育園」の日常

10 東京レガシーハーフマラソン2025
“誰もが走れる未来”をつくる大会へ

12 チームで作り上げる、最高品質の一品を。
「天井のない社会」づくりを目指す 革工房・UNROOF

14 2026年も開催中!
“街を歩くとアートに出会う”
中野で続く、街中まるごと美術館が生み出す人々のつながり

16 衆議院議員 森ようすけ×メルディア事務局長 永野周平対談
「18歳の壁」と「学びの場」現場の声が示す課題

18 みいちゃん's SWEETS
お菓子で見つけた未来への道

20 おさんぽ DE 楽しむ！
<宇宙玉>世界にひとつの“宇宙”を。
～寒川でガラス制作体験＆茅ヶ崎で海風リラックス～

24 応援してくれる人々の愛情を素直に受け止めて甘える大切さ
水越けいこ M Size はじまり Again

26 発達ガイドブック

28 世界へ羽ばたく才能を育む メルディア財団「青少年スポーツ支援」
湘南ベルマーレ 石井久継選手×一般財団法人メルディア 代表理事 小池 信三対談

31 プレゼント／八王子ビートレインズ

vol.71 MELDIA 2026 JAN.
発行元／一般財団法人 メルディア
広報誌MELDIA Vol.71／2026年1月25日発行

本誌の無断転載・複製を禁じます。
2017-2026©All Rights Reserved.
一般財団法人 メルディア／広報誌MELDIA

無料定期購読のお申し込みはこちらから

※QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です。

次号予告
MELDIA vol.72
2026年3月25日 発刊予定

一般財団法人 メルディア
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-5-22
セキサクビル7F
一般財団法人 メルディア
TEL:03-6302-1871

「入って5分も経たないうちに、『おそらく自閉スペクトラム症でしょう』と医師に言われて、『ああ、やっぱりか』と」。心配で検索するたびに出てきた言葉だけに覚悟はしていましたが、はっきり言われるとショックだったと語ります。

後日、正式な検査でも同じ診断が下りました。倉持さんは精神的なダメージで、1カ月ほどベッドから起き上がれない日々を過ごしました。「この先、湊のランドセルを背負う姿も見られないんじゃないか、と未来が真っ暗に思えて。私のせいだって自分を責め続けました」。

「一緒に攻略していこう」。夫の一言が前を向くきっかけに

そんな倉持さんを救ったのは、夫・ふ～どさんの存在でした。世界で戦うプロゲーマーのふ～どさんは、出会ったときからずっとポジティブな性格だったといいます。

「夫から、『そうやって寝ていても、時間は止まったままだよ。ちゃんと一緒に湊のことを攻略していこう！』と言われて、ハッとしました」。

ふ～どさんは湊くんが生まれる前から育児に積極的でした。「赤ちゃんは2～3時間で起きるから」と、夜担当と昼担当の「シフト制」を提案し、お互いの睡眠時間を確保したほどです。

「ゲーマーだからこそ、攻略方法を見つけるのが上手なんです。診断が下りてからも、夫なりに調べて育児をしてくれました。私は心配性で感情の波が大きい分、夫の冷静さに何度も助けられました」。

親のメンタルも大切に療育との向き合い方

湊くんは、保育園ではひとり遊びを好み、聴覚や感覚の過敏さから子どもの泣き声にパニックを起こすこともありました。それでも成長とともに、自分で落ち着く方法を見つけたり、泣いている子にそっと近づいて慰めるような仕草を見せたりするようになった。そんな姿に、倉持さんは小さな希望を感じます。

区の紹介で療育にも通い始めました。療育で出会った親たちとの情報交換も大きな支えに。「発達障がいの子に合う歯科情報は、本当にありがたかったです」と振り返ります。

一方で、週1回の親子グループ療育は、仕事との両立や、周りの子との発達差に落ち込むことも増え、次第に負担を感じるようになりました。

「集団行動は保育園で学べるし、無理をする必要はない。親のメンタルも大事にしよう」と夫婦で話し合い、現在は月1回の個別療育に切り替えました。

「個別だと湊を丁寧に見てもらえますし、私は先生と話す時間を大切に感じています。障がいについてよく知っている方と話せる機会は、親にとっても本当に支えになります」。

息子の攻略本を作り完璧を求めないようにする

子育てで特に大変だったのは「睡眠障がいと偏食」だったと倉持さんは話します。「寝室に入っても3～4時間は寝ないんです。ベッドでぴょんぴょん飛び跳ねて、夫婦であざだらけになることもありました。食事も決まったものしか食べず、栄養があるものを出してもお皿ごとひっくり返される日々でした」。

そんな日々の中で、夫婦は「頑張ることをやめよう」と決めました。

「早く寝ないなら、眠くなるまで待てばいい。最近は夜中に『そろそろ寝よう』と声をかけるんです。すると自分で寝室に行くようになりました。偏食も『このメーカーの蒸しパンなら食べる』と、湊が食べられるものを見つけて攻略していきました。バナナは食べるので栄養は大丈夫、と完璧を求めないようにしています」。

育児本は定型発達の子に当てはまることが多いもの。丸々参考にすることはやめました。

「特性は子どもによって違います。格ゲーでいうならキャラ対（キャラクター対策）ではなく、人対（人対策）が必要です。だから湊対策をしました。それぞれの〝攻略本〟を作るのが大事だと感じます」。

倉持さん自身、学校に行けなかった過去があり、夫婦ともに「普通のレール」に乗らない人生を歩んできました。だからこそ「息子も無理に同じレールに乗らなくていい」と自然に思えたことが、今の柔軟な育児につながっています。

孤独感こそが最大の敵。周りを頼る勇気を持ってほしい

2024年、倉持さんは湊くんの発達障がいを公表しました。きっかけは、知らずに子どものことを聞かれた時にうまく答えられず、苦しくなった経験からでした。

「公表後、9割5分は温かい反応で、周り

この日の取材にも、ふ～どさんがふたりを最寄駅まで送ってくれたそう。そんな仲良し家族と、倉持さんがレンズ越しに見つめる湊くんの成長記録です。

YUKA MINATO

頑張ることをやめよう、完璧でなくてもいい。それが“湊の攻略本”。

＼ことばより、体験を。／

子ども同士が育ち合う「上目黒どろんこ保育園」の日常

保育園と発達支援施設を一体的に営む上目黒どろんこ保育園。子どもたちがともに学び合い、育ち合う現場では、どんな日々が広がっているのでしょうか。施設長の松久保さんにお話を伺いました。

保育と発達支援をひとつ屋根の下で

上目黒どろんこ保育園は、認可保育園と児童発達支援事業所「つむぎ上目黒ルーム」を同じ建物内に併設しています。保育園には約70名の園児が通い、発達支援の一日の定員は10名。双方の子どもが混ざり合い、保育士と支援員が同じ制服を着て働き、一体的に保育・支援しています。「同じ制服を着て、同じように子どもを見ますが、行政上は全く別の事業所なんです。それでも〝子どもには境界はない〟と考えています」と松久保さん。

「子どもたちは〝この人は保育園の先生、この人は支援の先生〟なんて意識していません。でも行政上は、すべて線引きが必要なんです。廊下のどこからが発達支援の面積か、床にテープで区切りを貼らなきゃいけない、なんていうことも実はあるんです」と語ります。

こうした制度的な分断を超えようとする挑戦が、どろんこ会の併設モデルです。制度上の問題から別園舎・別入口だった時代には、「発達支援を受けていることを知られたくない」と裏口から登園する保護者もいました。けれど今では、同じ入口を通って登園することが当たり前になり、子どもたちは自然に混ざって遊んでいます。

「最初は〝支援が必要な子に手がかかっとで、『この湊とどう明るい未来を描けるか攻略しよう』と考えることができました」と語ります。

また夫婦でも得意不得意を補い合っています。育児は得意でも家事が苦手なふ～どさん。倉持さんが仕事と育児と家事の両立に追われないように、家事代行サービスも利用しています。「人には特性があり、完璧な人はいません。定型発達の人も発達障がいの人も、得意不得意の形が違うだけ。難しいことは外部の助けを借りるのもひとつの手です」。

これからも自分たちのペースで息子の成長を見守りたい

4歳になった湊くん。成長を感じる日々だと、倉持さんは顔を綻ばせます。喉が渇いたら牛乳とコップを持ってくるし、おむつも「持ってきて」「捨てて」と伝えると、自分で考えて動けるようになりました。意思疎通が取れるようになったのは、湊くんにとって大きな成長です。

「発語ももっと増えたらいいのですが、大人になって言葉がうまく出なくても、書くことで表現できる方もいます。湊がどうなるかは分かりませんが、いちばんいい方向に進めたらと思っています」と、倉持さんは優しく語ります。

明るい口調の裏には、たくさんの悩みや試行錯誤がありました。これからも課題は出てくるでしょう。それでも「なるべく明るくいよう」と決めた倉持さん。

「悩んでいるパパママたちは、SNSや自治体、療育など誰かを頼って、絶対にひとりで抱え込まないでください。孤独にならないように、支え合って生きていきましょう」と呼びかけます。

いつか「花粉症なんだよね」と同じくらい自然に障がいのことを話せる世の中になることを倉持さんは願いながら、今日もふ～どさんとともに湊くんの笑顔を優しく見守っています。

くらもち ゆか
倉持 由香さん

グラビアアイドル・タレント・俳優として活躍。女子e-sportsチーム「G-STAR GAMING」のプロデューサーを務める。2024年に、湊（みなと）くんの自閉スペクトラム症を公表。SNSや様々なメディアで発信を続け、その等身大の言葉は同じように子育てに向き合う家族に希望と勇気を届けている。

公式HP

3名様 PRESENT

Ⓐ 倉持由香サイン色紙

詳しくはP.31

みんなで育てた夏野菜を収穫。土のにおいと、なすの紫がうれしい季節。

て、うちの子が見てもらえないのでは〟という不安の声もありましたが、今は〝専門職がいることで安心〟〝多様な子と関われるのがありがたい〟という声が多いです。保護者の理解も、自治体の姿勢も少しずつ変わってきました。小さいうちからいろんな子と一緒に育つことが、一番のインクルーシブ教育だと思います」。

子どもから学ぶインクルーシブ

松久保さんが大切にしているのは、「子どもから学ぶインクルーシブ」という考え方です。「以前、自閉症の子と仲のよい2歳の女の子がいました。その子は、キラキラ光るものに惹かれて突然走り出してしまう子だったのですが、女の子が〝キラキラ〟を先に見つけて隠すように手で覆いながら歩くことで、その子は落ち着いて歩けたんです。あれは私たち大人にはできない支援でした」。

どろんこ会は、大人が「こうしなさい」と指示して動かすのではなく、子どもが環境の中で経験を通して学び、「ジブン」で考え行動する力を身につけることを大切にしています。

上目黒どろんこ保育園施設長の松久保　陽子さん

「困ったら人に尋ね、自分で考えて動く。兄弟姉妹のように生活や遊びを教え合う中で、子どもたちの生きる力が育まれていきます。たとえば散歩中に転んだ子がいると、すぐに他の子が手を差し出す。誰かが泣いていると、何も言わなくてもティッシュを持ってくる。そういう自然な支え合いの輪が、毎日の中で生まれるんです」。

一方で、大人が介入しすぎることの難しさも感じているといいます。「〝手を出さない勇気〟が必要なんです。大人が助けすぎると、子ども同士の関係が育たない。でももちろん安全の確保は最優先。大人がインクルーシブを壊さないよう、どう見守り、どこで支えるか、そのバランスを日々考えています」。

園児たちも、先生たちも園内は裸足。
地面の感覚を足でしっかりつかみ育ちます。

保護者とも対話を通じて理解を深める

10年前は、保護者から「45分間座れるようにしてほしい」「文字が書けるようにしてほしい」という要望が多く寄せられていました。「でも今は、〝集団の中でともに生きていける子に〟という声が増えています。保育と発達支援の両方を希望するご家庭も、毎月のように増えています」。

園では、運動会や発表会でも〝できる・できない〟を基準にせず、子ども一人ひとりの力が発揮できる形を大切にしています。「歩けない子を年上の子が手を引いてゴールした時、会場全体が拍手に包まれました。子どもたちは違いを自然に受け入れ、お互いを応援できる。大人が思う以上に、子どもたちの中には〝共に生きる力〟が備わっているんです」。

「障害のある子を〝特別な存在〟ではなく、〝一緒に育つ仲間〟として見てくれる保護者が増えました」と保護者の意識の変化も実感しているそう。

たとえ、保護者が支援が必要な子どもの行動に驚くことがあっても、対話を通じて理解を深めるようにしているといいます。「〝怖い〟とか〝びっくりした〟という気持ちも正直に話してもらいます。その上で〝どうしてそうなるのか〟を説明すると、〝そうだったんですね〟と納得してくださる。対話を重ねることが一番の理解につながります」。

大人も〝混ざる〟ことで生まれる学び

現場にはまだ多くの制度的な壁があります。保育園と発達支援事業所では、配置基準や行政の監督、補助金制度の有無も異なります。「同じように働いていても、処遇や手当が違う。だからこそ、職員が納得して働ける環境づくりが次の目標です」と松久保さんは語ります。

職員同士が〝混ざる〟ことも重視しています。かつては保育士と発達支援職が別々の島に座っていた職員室のレイアウトを、あえて一緒に配置し直しました。「同じテーブルで仕事をするようにしてから、自然に会話が増えました。おやつの時間を共有したり、会議も一緒に行ったり。最初は戸惑っていた支援職の先生たちも、今は〝ここが居場所〟と言ってくれるようになりました」。

心理士や作業療法士が子どもの観察方法を共有し、保育士が集団の視点から助言をする。「お互いの専門性を尊重し合うことが、本当の意味でのインクルーシブ保育につながる」といいます。

「大人がまず〝混ざる〟こと。子どもたちは大人の関係性を見ています。大人同士が自然に協力し合う姿を見せることが、何よりの教育なんです」。

保育園探しのポイントを伺うと、「園を見学するときは、先生ではなく子どもの表情を見てください。若い先生でも、子どもが安心してのびのびしていれば、それが一番。発達に特性のあるお子さんは〝空気〟で場所の良し悪しを感じ取ることがあります。お子さんが笑顔でいられる場所を選んでほしいですね」。

どろんこ会が目指すのは、誰もが同じ場所で育ち合える社会。子どもたちが互いに支え合い、学び合う日々の中に、その未来が少しずつ形になっています。

＼あそびにきてね！／
地域子育て支援カフェ ちきんえっぐ

東京都目黒区の子育て支援センターとしてさまざまなイベントを実施。どなたでも利用可能。
https://www.doronko.jp/facilities/chickenegg/

社会福祉法人どろんこ会

保育園・発達支援・学童などを展開する社会福祉法人。「にんげん力。育てます。」を理念に、共に育ち合うインクルーシブ保育を実践しています。
https://www.doronko.jp/

DORONKO Growing Together

TOKYO LEGACY HALF 2025

October 19, 2025

東京レガシーハーフマラソン2025

“誰もが走れる未来”をつくる大会へ

障がいの有無を問わず誰もが挑戦できる、東京レガシーハーフマラソン。東京2020のレガシーを受け継ぎ、初心者からパラアスリートまで多様なランナーが同じコースを駆け抜けます。財団の想いとT-20選手の声をお届けします。

©東京マラソン財団

東京2020のレガシーを、走る場として未来につなぐ

一般財団法人東京マラソン財団が主催する「東京レガシーハーフマラソン」は、2020年のオリンピック・パラリンピックで高まったスポーツへの関心を未来につなげるために誕生しました。お話を聞いたのは、レースディレクター室の鈴木学担当部長。「ランニングスポーツの普及を通じて、人々の健康増進と豊かな都市づくりに貢献したい」という想いがこの大会の原点です。

財団が大切にしているのは、〝すべての人に走るチャンスを広げること〟。初心者層はもちろん、障がいの有無を問わず参加できるよう初回からカテゴリーを設け、これまでに約440名の障がいのあるランナーが参加しました。さらにWPA(世界パラ陸上競技連盟)認定の「パラアスリート部門」も設置し、T・20クラスの知的障がい選手も2023年以降、毎年出場しています。

コースは、東京2020パラリンピックのマラソンコースを参考に、首都・東京の中心を駆け抜ける特別なルート。スタートとフィニッシュ地点は国立競技場で、初心者からエリートレベルの選手まで、多様なランナーが同じフィールドを共有できる点も、この大会ならではの魅力です。

大会を通じて広げたいのは、〝走る楽しさ〟だけではありません。「走る人、支える人、応援する人が、それぞれに喜びを感じられる大会になってほしい」と鈴木さんは話します。スポーツを通じたチャリティ活動や、障がい者スポーツへの理解を深めるきっかけにもなればと期待を寄せています。

T・20クラスの未来を育てる舞台として

今年の大会には、T・20クラスの選手が4名エントリーしました。財団は日本パラ陸上競技連盟と連携しながら選手発掘や競技力向上にも取り組んでおり、「東京レガシーハーフをステップに国際大会へ挑戦する選手が増えてほしい」という願いを込めています。

一般部門を含めると14,000名を超えるランナーが見事完走しました。

T・20クラスの選手にも直撃!

瀬田 幸輝 選手
(三重・医療法人永井病院所属)

「自己ベストには届かず悔しいです」と率直に語る瀬田選手。レースでは周りの選手が強く、前半で飛ばしすぎたことを反省しつつ、「東京の街は本当にきれいで、走っていて楽しかったです」と笑顔も見せます。ふだんはほぼ毎日、一人で練習を続けており、強みは〝粘りの走り〟。今回は発揮できませんでしたが、「トラックの800mや1500mで記録を伸ばしたいです」と前を向きます。応援に来てくれたお母様へ、「応援で元気をもらっている分、これからも力になれるよう頑張りいです」と感謝をえます。

▲憧れのエリートランナーたちとともに走る楽しさも。

▶東京の街中を駆け抜ける、その景色が最高に気持ちいい!

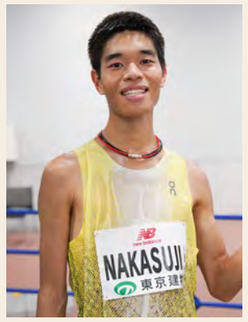
成田 裕介 選手
(東京・ONE TOKYO RC所属)

今年で4回目の参加となった成田選手は、初めて選手枠から出場しました。「90分切りを目指しましたが、後半が弱くて今日は厳しかったです」と振り返ります。仕事後に週4〜5日の練習をこなし、週1回はトラックでインターバル走にも挑戦しています。走歴は長く、2008年にフルマラソンを開始。剣道経験もありますが、「今は走ることが大好きです」と話します。今回はコーチも応援に駆けつけました。次の目標は「来年の東京マラソンで3時間15分切りです」。最後に「次は自己ベストを更新したいので、引き続き応援をお願いします!」と力強く語ってくれました。

「この大会は〝誰もがチャレンジできる大会〟として始まりました。スポーツを楽しむこと、目標へ挑戦すること、それをみんなで応援できる環境こそ、インクルーシブな社会につながると考えています」と語ります。T・20選手のみならず、障がいのあるすべてのランナーが自然にその輪の中にいることこそ、大会が目指す姿です。

今後も、より多くの市民ランナーやパラアスリートが参加できる仕組みづくりを進めていきます。

「ランニング経験や障がいの有無に左右されず、誰にでも開かれた大会に育てていきたいです。ぜひ気軽に〝走ってみたい〟という気持ちを持っていただけたら嬉しいです。大会へのチャレンジを心よりお待ちしています!」



中筋 陸駆 選手
(和歌山・和歌山走ろう所属)

「最初にペースを上げすぎて途中で苦しくなりました」とレースを振り返る中筋選手。それでも無事に完走し、「エリート選手と一緒に走れたのが楽しかったです」と嬉しそうに話します。練習は紀の川の河川敷が中心で、20kmをキロあたり3分半〜4分ペースで走り込んでいます。一緒に走ってくれる仲間もいるそうです。以前に10kmの大会にも挑戦しており、今回のハーフが新たなステップになりました。「次はもっと楽に走れるよう、ペースを上げていきたいです」と目標を語ります。応援に来ていたご家族とともに中筋選手の挑戦はまだまだ続きます。

東京レガシーハーフマラソン
東京2020のレガシーを継承し、初心者からパラアスリートまで誰もが挑戦できる都市型ハーフマラソン。国立競技場発着の特別なコースが魅力。
https://legacyhalf.tokyo/

一般財団法人東京マラソン財団
東京マラソンをはじめとするランニング大会を主催し、スポーツを通じた健康増進と共生社会の実現をめざす団体。多様な人々が参加できる大会づくりに取り組んでいます。
https://tokyo42195.org/

東京レガシーハーフマラソン

一般財団法人東京マラソン財団

TOKYO LEGACY HALF 2025

チームで作り上げる、最高品質の一品を。

「天井のない社会」づくりを目指す革工房・UNROOF

東京・久米川に設立（2017年）されたUNROOFは、高品質なものづくりに一切妥協しません。多様な背景を持つ人々が「チーム枠（Team Work）」として集い、一人ひとりの可能性に向き合いながら働く、「天井のない社会」を目指す革職人集団UNROOFの、事業代表の岡さんと3名の職人に話を伺いました。

「天井のない」フィールドで輝いてほしい

「障がいがあるから、できない」。そうした固定観念を打ち破ろうと活動しているプロフェッショナル集団があります。それが、革製品を製造するUNROOF（アンルーフ）です。

2017年、創業者の「障がいがあるだけで仕事の選択肢が制限される社会を変えたい。」という想いから設立されました。ブランド名である〝UNROOF〟には、障がいの有無に関わらず誰もが活躍できる「天井のない社会（un/roof）」を創るという強い意志が込められています。

職人の65～70％は障害者手帳を持つメンバーですが、彼らは福祉サービスではなく、株式会社の社員として入社し、プロの革職人として腕を磨いています。障がい者雇用という枠を設けず、誰もが「職人」として能力と個性を最大限に発揮できる場であることが大きな特徴です。彼らが丁寧に作り上げる製品は、その確かな技術と想いから多くのファンを呼んでいます。

事業代表の岡郁佳さん

「自分」も「他者」も受け入れる相互扶助の精神を

UNROOFの事業代表である岡さんは、元々Webマーケティングの分野で活躍されていました。しかし、UNROOFのメンバーが作る革製品のクオリティの高さに驚き、「商品を通じて、障がいのある人たちへの社会の認識を変えられる」と確信し、事業代表を引き受けました。

「UNROOFでは、メンバーを一方的に助ける『支援対象』ではなく、一緒に働く『仲間』として捉えています。目指すのは、彼ら自身が社会に夢や希望を与える存在になることです」と岡さんは語ります。

働く上で、岡さんが特に重視するのは「自己受容」と「相互扶助」の精神です。「発達特性がある方の中には、ミスを恐れて自分を責めてしまう方もいます。しかし、それではいい循環は生まれない。自分のできること・できないことを認識し受け入れ、さらに他者の特性も受け入れる『お互い様』の精神こそが、チームで働く上で何よりも大切です」。

UNROOFは、この相互扶助の精神のもと、今後10年で全国にサテライト工房を作り、東京に来られない人も地元で働ける環境を整える計画を進めています。さらに、革細工だけでなく、特別支援学校でも学ぶことが多い布や木工などの工芸分野へも事業を多角化し、より多くの人が「手に職」をつけられる未来を目指しています。

S.R.さん（ASD）

京都から単身上京し、UNROOFの職人になったS.R.さん。以前は事務職やパーソナルジムトレーナーといった全く異なる仕事も経験しましたが、「ものづくりに興味があり、手に職をつけたい」という一途な想いで、障害者雇用でものづくりができる場所を探す中で、UNROOFにたどり着きました。

初めての職種でありながら、日々一つひとつ着実にクリアしていくことで、プロの技術を身につけてきました。最近では、店舗によって異なるミシンの仕組みを自分のものにして製作できたときに成長を実感。

次の目標は、革製品の「花形」とも言える財布の製作です。また、現場で培った技術をさらに高めるため、東京にある革細工の学校で専門知識を学びたいという意欲に燃えています。

motoさん（ADHD）

入社5年目のベテラン職人のmotoさんは、ブックカバーや財布の製作、ミシン縫製を担っています。motoさんがこの道を選んだきっかけは、「細部に注意を払う性格」を製造の仕事で活かしたいと考えたからです。特に、品質へのこだわりは人一倍強く、「ちょっとしたずれや糸の飛び出しもゼロにしたい。自分が満足できるものを作る」ことを常に心がけています。この高いプロ意識が、有名作家とのコラボレーションにつながった製品開発にも活かされています。

一方、ADHDの特性としてスケジュール管理が苦手な側面もあります。しかし、そこは一人で抱え込まず、代表の岡さんに相談し、優先順位を決めてもらうなどで乗り越えています。motoさんは「自分の経験が、障がいのある人たちの仕事への情熱を後押しできれば」と、誇れる仕事をしたいと語ります。

湯本さん（視覚障がい）

前職はアニメーターというクリエイティブな分野で活躍していた湯本さん。視野狭窄というハンディキャップと向き合いながら、現在はブックカバーの製作だけでなく、現場の進行や品質を管理する生産管理というチームの要を担っています。湯本さんは、革製品の組み上げ工程で生じる微細なズレなどの課題を、「難しくも楽しい」と表現します。繰り返し練習することで品質の向上を実感し、一度は諦めたものづくりへの熱意を再確認しました。

リーダーとして、湯本さんは「失敗は起こり得るもの」という前提でチームを温かく支えながら、職人一人ひとりの「こだわり」や「個性」が作品にもっと反映されれば、UNROOFの現場がもっと面白くなると期待を寄せています。「好きこそものの上手なれ」。始めはできないこともあって当然だけど、好きな気持ちが〝できる〟に繋がると、力強く語ります。

3名様 PRESENT

B
本革ブックマーク2枚セット
※色は選べません

詳しくはP.31

UNROOF

「天井のない社会」を掲げ、障がいのある職人が多く活躍。高い技術と揺るぎないこだわりで、ブックカバーをはじめとする高品質な革製品を生み出します。

https://unroof.jp/

＼2026年も開催中！／

“街を歩くとアートに出会う”

中野で続く、街中まるごと美術館が生み出す人々のつながり

15年以上続くアール・ブリュットの祭典「NAKANO街中まるごと美術館！」。商店街を舞台に、多様な表現が地域と交わり続けてきた中野ならではの取り組み。愛成会理事長でアートディレクターの小林さん、キュレーターの渡邉さん、中野ブロードウェイ商店街振興組合理事長の青木さんにお話を伺いました。

左から中野ブロードウェイ商店街振興組合理事長の青木武さん、愛成会理事長でアートディレクターの小林瑞恵さん、キュレーターの渡邉昌美さん

アール・ブリュットが教えてくれる〝生まれたままの表現〟

「アール・ブリュット」、芸術家ジャン・デュビュッフェが提唱したこの概念は、専門の美術教育を受けていない人たちが、独自の方法で〝生〟のまま生み出す表現を指します。小林さんは「アール・ブリュット＝障がい者アートではありません」と強調します。40歳を過ぎて創作を始めて巨大建造物を作る人もいれば、海外では交霊術の中で描く人もいる。障がいの有無を問わず多様な作り手がいるのです。

その多様さに心を動かされ、小林さんは10年以上にわたり、国内外で障がいのある表現者の作品発表を支援してきました。2009年にパリで行われた展覧会では10万人が来場。日本のメディアでは〝障がい者アート〟とだけ取り上げられた作品が、海外ではいちアートとして堂々と、そして高く評価されるという逆転現象に立ち会います。「同じ作品でも〝どこで、誰が見るか〟で評価が変わるんです。だからこそ、もっと開かれた場所に出ていく必要があると思いました」。その思いが、後の「NAKANO街中まるごと美術館！」につながっていきます。

美術館がない街で生まれた〝街全体を美術館にする〟という発想

愛成会がアール・ブリュットの発信に商店街を選んだ理由は、「街に美術館がなかった」こと。展示スペースはないが、人の往来は多い。ならば――という逆転の発想で試みが始まりました。

商店街振興組合の青木さんは「当時の商店街は、子どもたちが離れていく状況もあり悩みが多かったんです。地域とのつながりを模索していた頃でした」。そこに、愛成会から〝作品を飾れないか〟という相談が届きます。「最初は正直、全く無知でした。アール・ブリュットって何？」と笑う青木さん。ところが、作品を目にした瞬間、価値観が一変。「予想以上にすごい。これは来年もやろう、とその場で言いましたね。役員も衝撃を受けていました」。こうして2010年、中野ブロードウェイを中心に展示が始まります。商店街で展示することには大きな意義がありました。「商店街って本当に多様性そのものなんです。美術館に行かない人にも〝偶然の出会い〟がある。これはアートの可能性をぐっと広げます」。

展示は全国から選ばれた多様な作家の作品が中心で、障がいの種類や所属施設に関係なくセレクト。過去には袋留めのワイヤーを使った3センチほどの人形作品など、独創性あふれる表現が並びます。「皆さん素材の使い方が本当にユニークなんです」と渡邉さん。

近年は、立川・武蔵野・三鷹など〝中央線〟アール・ブリュット〟として取り組みが周辺地域にも広がり、中野の取り組みは一つのロールモデルとなっています。

〝街×アート×人〟で生まれる新しいつながり

「中野のアール・ブリュット展の特徴は、〝見るだけの展示〟に留まらず、〝街の人〟が参加者になる〝仕組みが多く盛り込まれている点です。地元小学生による音声ガイド、専門学校生との着物やファッション、スイーツ製作などのコラボレーション、お店での実物展示、街中を回遊して楽しむ企画など多彩です」と渡邉さん。

小学生の音声ガイドは、「街の中で小学生の声が流れて、自分の感想を交え作品を紹介する。来場者にも作家自身にもない気づきを与えてくれて、すごく良かったですね」と小林さん。

作品が商店街という〝日常空間にある〟ことは、地域福祉にも寄与しています。「昔は愛成会の施設の外観が暗く、建物も閉鎖的だったので、どんな人たちが暮らしているのか少し不気味に感じる人もいました。でも作品を通して障がいのある人たちの存在を身近に感じて理解できるのは大きい」と青木さん。さらに、お店の中に実物展示があると、店主と来場者が自然と会話をはじめることも。「商店街って、本来は〝顔の見える関係〟をつくる場所なんです。アート展示を通して会話が生まれるのが一番うれしいですね」と青木さんは続けます。

街をもっと〝開かれた場所〟に

今年も1月24日～2月22日の期間に「NAKANO街中まるごと美術館！」が開催されます。近年ヨーロッパの芸術関係者や、国内では福祉や芸術に限らず他分野の視察者が訪れています。街の広域で人の日常空間に展示会場があることは国際的にも珍しく、〝街に開かれた美術館〟として注目されています。

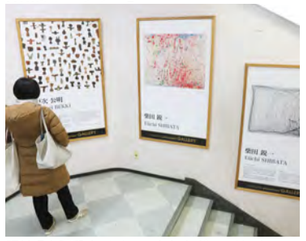
中野ではさらに日常的にアール・ブリュットが存在する街づくりを目指します。最後に、小林さんは「表現って、誰にとっても自由なものです。正解もないし、特別なものだけが評価されるわけでもない。自分の好きな素材で、好きな形で、日常の中に〝表現する時間〟があると、世界がすこし豊かになります。アートをきっかけに、人と出会ったり、街に出たりすることで、社会とのつながりも広がっていきます。ぜひ気軽に触れてみてください」。

「街がまるごと美術館になる」。その思いは、人と街と表現をつなぎ、確かな広がりを見せています。

中野サンモール商店街「空中ギャラリー」

商店街を抜けるまでたっぷり楽しめる

中野ブロードウェイ商店街「階段ギャラリー」



踊り場や階段まで、ちょっとしたギャラリーに

NAKANO街中まるごと美術館！

アール・ブリュット 一人の無限の創造力を探求する2026－

観覧・参加無料！

2026年1月24日（土）～2月22日（日）

展示場所 中野ブロードウェイ商店街、中野サンモール商店街、中野南口駅前商店街、中野レンガ坂商店会、中野マルイ、なかのZERO本館、三井住友信託銀行 中野支店

前田貴「キャリアカー」

中野南口駅前商店街「看板ギャラリー」

数十軒並ぶ店舗のアーケード下の看板がアートで彩られます

中野マルイ「隠れ家ギャラリー」

商業施設には隠れ家ギャラリー。ゆっくりとお気に入りの作品を探しに

AOKI（バッグShop）

商店街のお店の中に実物の作品が並びます

なかのZERO本館展示ギャラリー

展覧会場では多数の実物作品を見ることができます

中野レンガ坂商店会「坂道ギャラリー」

南口のレンガ坂の通りでは作家と作品を並べて展示

織田製菓専門学校コラボ企画

坂元 郁代「無題」

アール・ブリュットの作品から食材や食感、香りを想像した“スイーツ製作”も

愛成会では障がいのある人もない人も創作を楽しめるアトリエばんげあを展開

＼今年も開催中！／
NAKANO街中まるごと美術館！

会期：2026年1月24日～2月22日
観覧無料
https://nakano-artbrut.info/

社会福祉法人愛成会 法人企画事業部

アール・ブリュットの普及啓発や東京アートサポートセンターRightsによる障がいのある方の芸術活動の普及など様々な活動から、誰もが暮らしやすい街づくりを目指す。
https://www.aisei.or.jp/kikaku

展示画像については全て過去のものとなります。